

谷崎潤一郎「金色の死」試論——〈鏡〉を描くこと——

寺澤 誠人 TERASAWA, Makoto

「金色の死」は、一九一五年に『東京朝日新聞』に全一四回にわたって連載された谷崎潤一郎の小説⁽¹⁾であり、最大公約数的な読み方では、「富による美の実現の、理論と実践が夢みられた小説」⁽²⁾である。「金色の死」の先行研究について、浅見歩惟は以下のように指摘している。

研究のまなざしは長らく岡村君へと向けられてきたが、「金色の死」という作品題が指す岡村君の死は〈私〉の存在なしには語られることがなく、ゆえに〈私〉について考察することは作品解釈にとって不可欠である。「……」しかし、現在までの研究では〈私〉と岡村君の「見る」「見られる」という関係性に着目した考察が中心であり、岡村君の死を〈芸術〉だと評価する〈私〉の内面そのものに言及した例はないに等しい。⁽³⁾

本稿ではこのような浅見論の問題意識を引き継ぎ、「〈私〉の内面」に着目している。そもそもこのテキストは、「私」が「岡村君」との「秘密」という「条件」に背いて語ったものである。であるならば、「〈私〉に

いて考察する」とともに、「私」の語る動機についても一考する必要があるはずだ。

よって、「金色の死」の語り手である「私」に論の立脚点を置き、「私」と「岡村君」の関係性に着目し、論を発せさせる。簡単な見取り図を述べておくが、Ⅰでは、「私」と「岡村君」の関係性を網羅的に整理し、Ⅱでは、それを引き継ぎながら、ラカン「鏡像段階論」を援用し、テキスト読解を試みている。そして、Ⅲでは、「私」が「岡村君」の「評価」を「世間の人々」に問うねらいⅡ語るねらいを論点とし、Ⅳでは、結語として「私」がこのテキストを語る意義について述べている。

Ⅰ 「私」と「岡村君」の関係

「金色の死」は、「岡村君は私の少年時代からの友人でした」という「私」の語りからはじまる。彼らの出会いは「丁度私が七つになった年の四月の上旬」に遡り、そこからは一貫して、「私」と「岡村君」のみが語りの対象となっていく。それを表すように、テキスト内、固有名詞をもって登場するのは「私」（島田家の総領息子）と「岡村君」のみであり、ま

た、以下の引用のように、彼らの交友は回顧される。

試験の度毎に必ず私は全級の首席を占め彼は次席を占めました。二人は先生からも生徒からも、除け者扱いにされて居ました。随つて、二人の交情は期せずして親密になり、お互に双方の長所を尊敬し合ひつゝ、心私かに級中の劣等生を軽蔑して居たのです。(四六六頁)

こうして序盤の語りにおいて、二者が前景化／周囲が後景化され、作品空間が構成されていく。さらに、二者をつなぎ合わせるものとして「芸術」がある。「私」は「中学の一年頃から、将来文科大学を卒業して、偉大なる芸術家になるのだと揚言して」おり、「岡村君」も将来の展望を「君と同じ」ように共有していく。しかしながら、「私」と「岡村君」は、「学問」の成績の差や、「芸術」観の相違によって、次第に道を違っていくことになる。

現在まで、この二者の関係は、「金色の死」は「岡村君」の「死」を終結とする、芸術家の「生」を描いた作品⁽⁴⁾であると指摘した藤崎早苗の、経済的に恵まれた観念的な「芸術」の追求者と、生活的な「芸術」の実践者といった見方や、高橋美晴の「谷崎の分身として表裏一体である「私」と岡村君」⁽⁵⁾という見方がなされている。三島由紀夫は「この種の小説の定石として、話者の「私」は岡村君を際立たせるために故意に凡庸な性格を与えられて」いることを指摘しているが、本稿ではこの指摘に対して、逆説的に「凡庸な性格を」演じる「私」という語り手と捉えなおすことから始める。

そこで、まずは、「金色の死」における「私」と「岡村君」の関係及び、語り方・語られ方について確認してみよう。

その上私は学問が非常によく出来て、算術でも読書でも凡ての学課が私の頭には実に容易くすらく／＼と流れ込みました。恰も白紙へ墨

を塗るやうに、聞いた事は一々ハツキリと何等の面倒もなく胸の中へ記憶されるのです。私は多くの生徒たちが、物を覚えるのに困難を感じると云ふ理由を解するのに苦しみました。／＼全級の生徒のうちで、誰一人として私の持つて居るいろ／＼の長所に企及する者はありませんでした。唯纔に岡村くんが、或る方面に於いて多少私に類似し、若しくは凌駕して居るだけでした。(四六五頁)

「私」は周囲を度外視しながら、「岡村君」だけを「私」に追隨、凌駕する者として認めている。前の引用と併せて、学校という制度のなかでとくに、「学問」においては二者の関係は「私」優位ではあるものの、ひとまずは等級であると理解できる。加えて、前に確認したように、二者はともに「偉大なる芸術家」を志している。「私」は「芸術より外に楽しみのある可き筈はない」と「一途に思ひ込んで」おり、「岡村君」も、「芸術観の上から、私の試みて居る努力が全く無意味であると信じて」いるなど、二者にとつて、ある意味は「芸術」のうえに発生するものであり、「芸術家」になること／＼であることが彼らの自己同一性^{アイデンティティ}であると確認できる。

しかしながら、以下の二つの観点では明確に「私」と「岡村君」は異なっている。一つは「富」の観点、二つ目は「美」の観点である。「私」は幼い頃、家業の「酒問屋」が「繁昌」しており、裕福であったことを述べている。対して「岡村君」は「伯父」のもとで生活しており、亡き両親の資産は、以下のように語られる。

当時世間の噂に依ると、将来彼が相続す可き岡村家の財産と云ふものは、恐ろしい多額なもので、諸種の株券、鉱山、山林、宅地などを合算すれば三井岩崎の半分ぐらゐは確にあるとの評判でした。ですから自分の家の「富」の程度を比べたなら、私は到底彼の足許に

も及ばない訳なのです。私はそれを悲しいと思ひました。(四六六頁)
 「当時」という語りの時差や「世間の噂」という情報の不正確さがあるから、これらの語りをそのまま咀嚼するわけにはいかないが、注目すべきは、「私」が「岡村君」と「富」の程度を比べ、「彼の足許にも及ばないこと」を「悲しいと思」ったことである。前の「学問」とは違い、「富」は先天的なものであり、純粋な能力や評価に還元できるものではない。しかし、「私」はそれを「比べ」てしまい、その差に「悲し」む態度をとるのである。

「美」の観点も同様である。「私」は「岡村君」の容姿をたびたび語り、神格化するが、自身の容姿についてはあまり語らない。もちろん、「服装」や「瘦せた」「憔悴」といった形容詞は並ぶが、「私」の具体的な体格や顔つきを示すような文章は見当たらない。つまりは、「私」の容姿のヒントとなる情報、想起させる情報はテキスト内には見当たらないのに、「私」はまた、自身と「岡村君」の容姿における「美」を比べるのである。

岡村君の服装は、役者の子供のやうにぞろ／＼した私の着物と反対に、いつも活潑な洋服姿でした。半づぼんに長い靴下を着けて、さも柔かそうな半靴を穿き、頭にはキツと海軍帽を被つて居ます。その頃の洋服は今よりも遙に珍らしがられたものですから、彼の服装は私のよりも人目を惹き、余計羨望的となりました。(四六六頁)
 「彼の服装は」、「私の」それより「人目を惹き」と、比較対象の前提となるのは、やはりそれに関する情報がない「私」なのである。

その後、「私」の「父」が亡くなり一家が困窮した後も、つまりは、「私」と「岡村君」の「富」の力の差が絶対化したあとも、「私」は「岡村君」への対抗意識を募らせていく。

少なくとも学問の点に於て、私は岡村君に負けてはならないと云ふ

気が終始あつたのです。其上自分は貧窮な学生であると云ふ事が刺激になつて、私は激しい神経衰弱に陥る程無我夢中の勉強を続けました。私の頬は痩せ、血色は青褪め、見るから哀れな、うら淋しい姿になりました。(四七五頁)

「学問」においては、「岡村君」の「数学」やそれを必要とする「学課」への嫌悪にはじまり、「私」と「岡村君」の「学問」における力の差は開きはじめることになる。今まで見てきたように、「富」や「美」の観点から「岡村君」にかなわない「私」は、「少なくとも学問の点に於て」、「私は岡村君に負けてはならないと云ふ気が終始あつた」ことを認めている。さらに「私」は、「芸術」は「肉体美」から始まるという、「岡村君」の「芸術」観を「一応尤もだと思ひ」ながらも、「彼の肉体万能説に左祖する訳には行」かない。それは、「奇矯に過ぎる」という理由からではあるが、「私」は「思想が第一」と反対し「肉体よりも思想が第一だ。偉大なる思想がなければ、偉大なる芸術は生れないのだ。」と、逆説的に「思想」への過度な傾倒を強化していく。

そういった「岡村君」の「富」や「美」への対抗手段として、「私」の「思想」や「学問」への試みも、一旦は功を奏したように見える。以下の引用を見てみよう。

二年間ばかり、私は一生懸命読書に耽りましたが、丁度高等学校の三年生になつた年からそろ／＼詩だの小説だのに筆を染め出して、諸種の文学雑誌へ寄稿するやうになりました。私の名前は直に文壇の人々から認められるやうになり、新進作家のうちでも将来有望な一人として目指されました。それが当時の私に取つてはどんなに嬉しかつたでせうか。私はやがて自分の名前が、紅葉や一葉や、子規などゝ列んで、明治の文学史のペエヂを飾るべき一員となるべき事

を想像しました。私はすっかり図に乗って、感興の湧くまゝに無闇と沢山の創作を試みました。実際、筆を執らずには居られない程思想が滾々と流れ出るので、いくら書いても枯渇することがあらうなどとは思ひも及ばなかつたのです。「己はどう／＼岡村に勝つてやつた。」と、私は感ぜざるを得ませんでした。（四八二頁）

「偉大なる芸術家」を志す「私」は、「己はどう／＼岡村に勝つてやつた。」と、私は感ぜざるを得ませんでした」と「岡村君」に対する勝利を認めている。

これまで見てきた「富」「美」／「学問」「思想」という観点、それら自体では意味をなさない。なぜなら、彼らは「偉大なる芸術家」になるのであって、行為上の意味は「芸術」のうえに発生するからである。そう考えたとき、この時点において、「私」は「文壇の評価」という、二者の関係性からは逸脱する新たな「評価」を獲得したことになる。それは、まさしく「私」の「岡村君」に対する一時的な勝利を意味している。

ここまでの二者の関係についての議論を整理してみよう。「私」の語りにより①二者は前景化され、さらに、②二者にとっては「芸術」こそが自己同一性である。③「私」は「岡村君」に「富」と「美」では対抗できないゆえに、「思想」「学問」への傾倒を強化していき、④「私」が「文壇」から「認め」られることで、「私」は第三者による「評価」を獲得する。そして、それは⑤「思想」「学問」による「私」の一時的な勝利、とまとめることができる。

Ⅱ 〈鏡〉としての二者

「私」と「岡村君」の二者関係を整理したIでは、「私」が「思想」において一時的に勝利したところまで確認した。しかしながら、「私」は見

ることで「岡村君」への勝利を疑いはじめる。以下の引用を見てみよう。

私は一面に彼を軽蔑しながら、一面に彼の存在を恐れて居ました。彼の顔を見ると、何だか自分の現在の仕事に甚だ不安定で、盲目的であるやうな気がするのです。（四八五頁）

「私」は「文壇」からの新たな「評価」を獲得したはずが、「彼の顔を見ると、何だか自分の現在の仕事に甚だ不安定」に感じ、「盲目的であるやうな気がする」ようだ。さらに、次の引用も見てみたい。

私が間断なく働いて居る間に、岡村君は間断なく遊び続けました。「学問を尊重する。」と云つた最初の宣言はいつの間にか棄却されて、彼の豪奢と放蕩とは日に日に募るばかり、学校なんかへめつたに出席しませんでした。彼の容貌と体格と服装とは益々立派に艶麗になつて、何だか傍へも寄り付けないやうな光彩を放つて見えました。話をしようとしながら、私は思はず其の美に打たれて黙つて了ふ事が度び度びでした。（四八五頁）

「数学」やそれを必要とする「学課」での「低能」を克服したはずの「岡村君」は次第に、「間断なく遊び続け」るようになる。「少なくとも学問の点に於て、私は岡村君に負けてはならない」と思っていた「私」にとって、「学問」における「岡村君」の陥落は、「思想」での勝利と併せて、自身を優位にするはずのものである。しかし、そういった「学問」や「思想」を凌駕するほど、「私」は「岡村君」の「美に打たれて、黙つて了ふ事が度び度び」あり、時を同じくして、「私」に勝つたと思わせた「思想」も次第に枯渇していく。

断つて置きますが、文壇に於ける私の評判は、早くも其の頃から段々下火になつて、書く度毎に冷酷な批評家から有りと有らゆる罵詈謗を加へられて居たのです。おまけに私の学費だの一家の生活費

だのに遣ひ減らした父の遺産は、既に空乏を訴へて居たので、私は嫌でも応でも原稿料を稼がねばならないハメに陥つて居たのです。

容易に枯渇する筈がないと信じて居た私の思想は、此処に至つて忽ち行き詰まつて了りました。(四八七頁)

「私」は「文壇」から新たな「評価」を獲得したはずが、「批評家から有り」と有らゆる罵詈謗を加へられ」るようになり、家族の「生活の為め」に「愚にもつかない「お話」を書き続けねばならない事態となる。そのような事情も相まつて、「容易に枯渇する筈がない」と信じて居た私の思想は、此処に至つて忽ち行き詰まつて了」う。このような状況に至り、「私」は「芸術家」ほど、「非芸術的な職業」はないと思ひはじめる。そして、以下のように「岡村君」と自身を「見較べ」る。

心細いにつけても想ひ出すのは岡村君の事でした。あまり久しく会わないので、或る日私はふと思ひ立つて彼の邸を訪問して見ました。折よく在宅して居た彼は、応接間の椅子に腰を掛けた私の姿を眺めながら、「暫く会はない間に君は大そう痩せたなあ。」と云ひました。

私は其の部屋の鏡に映つて居る二人の顔を見較べて、孤影悄然たる自分の風采に恥入りました。(四八五頁)

注目すべきは、「私は其の部屋の鏡に映つて居る二人の顔を見較べて、孤影悄然たる自分の風采に恥入りました」の一文である。今までは、「私」は一方的に「岡村君」を見る存在であつたが、この場面において「私」は「鏡」のなかに、自身と「岡村君」を見、「較べ」るのである。テクストに即して考えれば、「私」が「岡村君」への対抗心を募らせたのも、「私」から「岡村君」への一方的な視線によるものであつた。しかし、「鏡」のなかに、自身と「岡村君」の容姿を見いだすことで、のち、物語の様相は一変していく。

このような「私」と「岡村君」の関係を考えるうえで、ラカン「鏡像段階論」⁽⁷⁾が有用となる。「金色の死」を念頭におきながら、「鏡像段階論」を検討してみよう。

幼児期、運動神経が未発達な段階では、視神経が優先的に発達する。

それゆえ、「鏡遊びが幼児にとって大きな価値を持」ち、それは、「鏡遊びが反射の面を構成するからであり、その面の上に幼児は、自分の活動を取りする活動が、他者に立ち現われるのを見る」からである。ここでいう「他者」は鏡像自己(「鏡」に映つた自己)を指しており、「先取り」とは、自己の内面が不統一であるのに関わらず、「鏡」に映る身体は統一し、それとして存在していることを意味する。つまり、内面的な自己像が確立していないこの時期において、鏡に映る自己を見ることで、自己の「フォルム」という「身体へのイメージ」を獲得していくのである。しかし、この段階では、未だ内面の自己同一性^{アイデンティティ}は不完全な状態である。それを獲得していく過程を、ラカンは以下のように論じている。

主体にとっては、他者との関係からの抜去は、主体の自我のイメージを変化させ、きらめかせ、動揺させるのです。つまり完成させてはそれを崩します。こうして、主体は自我のイメージのこれまで決して到達できなかったような完全な姿に気付くのです。その結果主体は、自らの欲望の全ての段階、即ち自らのイメージを安定させ、栄養を与え、受肉させてきた全ての対象を、認知することができるようになります。主体は、次々と続く取り戻しと同一化によってその自我の歴史を作り上げているのです。

「鏡像段階論」における「鏡」の機能は、次第に他者へと移っていく。はじめ、「鏡」に映っていた自己の鏡像は、他者のなかにその場所を変えていく。そして、その鏡像の価値は自己ではなく、他者のなかに存在す

ることになる。「主体」はその他者の中に疎外された鏡像自己を奪いながら、そして、その鏡像自己と、自身の内面を「同一化」する過程を繰り返しながら、「自我の歴史を作り上げて」いく。換言すれば、鏡像自己が他者に映る限りは、そういった他者が存在する限りは、自己が自己を探求、言及する必要はない。自己同一性^{アイデンティティ}≠鏡像自己は、他者がになつてくれるからである。自己を自己と保証するものは、他者のなかに存在することになる。こうした過程は自己同一性^{アイデンティティ}が他者に依存することを示し、しかし、それだけでは一般的な議論に留まる。「鏡像段階論」の特筆すべき点を、新宮一成は以下のように指摘している。

特権的な鏡像が確定される契機は、あの「社会的な向け換え」「鏡像自己が鏡から他者へ移ること」と共に訪れる。精神分析の経験は、特権的な鏡像が主体と他者との関係の中で作り出されていることをしばしば明らかにする。我々がもはや失われた対象としての起源の自己と向き合わなくてもよいようにしてくれるのは、鏡像として指定された別の人なのである。／鏡像段階は、純粹な鏡像体験の他に、このように、別の人間の中に自己の鏡像を預けるといふ重要な成分を含んでいる。鏡像が他者である限り、それが潜在的に自己であったとしても、我々は自己言及の困難に直面しなくても済むようになる。我々はその人を常に他者として遇すればよい。⁸⁾

この前提に立ち、もう一度、テキストに立ち戻ろう。ここからは、先に述べてきたことを適及的に振り返りながら、「鏡像段階論」を補助線として援用しつつ、「金色の死」を読んでみたい。

まず、①周囲から前景化された二者は、〈鏡〉として必要不可欠な両者である。そして、二者は②「芸術」を自己同一性^{アイデンティティ}としており、それは、「先取り」される自己像Ⅱ〈鏡〉が「芸術」という観点から両者を映し出す

ことを意味している。さらに、③「私」は「岡村君」に「富」と「美」では対抗できず、「思想」「学問」への傾倒を強化していく。それは、「芸術」という観点から〈鏡〉に映し出された「私」の自己像でもある。そして、④「私」が「文壇」から「認め」られ、第三者による「私」への「評価」を獲得する。これは、⑤「思想」「学問」による一時的な勝利であり、一時的な〈鏡〉(Ⅱ「岡村君」)からの脱却を意味している。「文壇」から「認め」られることで、「私」は「岡村君」の他に、「芸術」という観点から映し出す「評価」という〈鏡〉を獲得したのである。

その後、Ⅱで確認してきたように「私」は「行き」づまりと「貧窮」に苦しみ、第三者(Ⅱ「文壇」)による「評価」を消失する。こうして、「私」は「思想」という「芸術家」としての自己同一性^{アイデンティティ}を否定され、新たな〈鏡〉を失い、現実の「鏡」で「岡村君」と自己を「見比べ」ることになる。この象徴的な場面で「私」は、ふたたび「岡村君」という〈鏡〉に映し出された、自己同一性^{アイデンティティ}を失った自己を発見するのである。

さらに、「鏡像段階論」を援用し、テキスト末尾、「私」が「岡村君」の「評価」を「世間の人々」に問うねらいを、Ⅲにおいて検討する。

Ⅲ 「私」の復讐

Ⅱの議論に加えて、もう少し「私」と「岡村君」の関係について、テキストから空白を読んでみたい。「私」が「偉大なる芸術家」に向けて順調に歩を進める間、「岡村君」は「学問」の成績に陰りが見え始め、「私」の「近眼」がひどくなると、彼は揚々と「芸術」における「肉体」の重要度を語る。そして「私」が小説家として目指されはじめたとき、「岡村君」は「芸術に対する態度」を決めかね、「私」が「文壇」からの非難と貧窮に追い詰められるなか、彼は「芸術」的理想郷の建設に励むのであ

る。

振り返れば、「岡村君」が「尊重する」と言った「学問」をないがしろにし、「豪奢と放蕩とは日に日に募るばかり、学校なんかへめつたに出席し」ない状況になったのも、「私」が「文壇」に「認められる」と同時期であり、「私」の「偉大なる思想」への試みも、「岡村君」は「自分の芸術観の上から、私の試みて居る努力が全く無意味であると信じて」いた。

ここから、Ⅱで確認した〈鏡〉の機能が「岡村君」へも至っていると考えてみたい。「私」は「岡村君」という〈鏡〉により、「学問」や「思想」への傾倒を強め、「偉大なる芸術」には、「偉大なる思想」を必要とする考えに至った。逆説的に、「岡村君」も「私」という〈鏡〉により、その自己像を確保していたのではないだろうか。それによって、「私」にはない「肉体」や「美」、「爵位」や「富」に固執していたと考えることができる。つまりは、「岡村君」のいきすぎた「芸術」論も、彼自身が「芸術」品になるという試みも、「私」の存在が彼にそうさせていたと考えられるのである。「私」と「岡村君」の関係について清水良典は以下のよう指摘している。

彼はその思想の凡庸さと、美に程遠い肉体によって、「岡村」を引き立てつつ、その言動の報告者・寵人となる。「……」「岡村」の美しい肉体と富に対して、「私」は醜く、そして貧しい。その醜さと貧しさに対する癒されない苦い自覚が、「岡村」の美と富への永続的な慣れの源泉なのである。快楽も才能も運も、あらゆる良いもの望ましいものは美と富に集中し、好ましからざる悪しきものは醜悪と貧困に帰せられる。この二元世界において、作者が美への憧れを描き続ける文学営為は、彼が貧困と醜悪の側に身を置くことによって存続

する。その二極対立は、〈作品〉を生産するために、むしろ要請され、たえず強化される。⁹⁾

清水が指摘する「美と富」と「醜悪と貧困」の「二元世界」は、語り手の「私」による自己演出でもあるだろう。自身の「醜悪と貧困」を描くことで、同時に「岡村君」の「富と美」を強調する。こういった「私」の語りの演出を疑い、「私」と「岡村君」の〈鏡〉という機能に着目するのであれば、「岡村君」が「私」の「思想」「芸術」の陥落にみたのは、「思想」の限界であり、さらなる「肉体」の強化である。

「金色の死」末部は性急に語られていく。「私」は「岡村君」の「芸術の天国」の描写に入ると、「此れ等の結構がいかに鬼麗の極みであつたかは、概ね読者の想像に委せて詳細な記述を試みる事を避けようかと思ひます」と語っている。さらに、以下の引用を見てみよう。

私はもう、此れ以上の事を書き続ける勇気がありません。兎に角あの浴室の光景などは、其夜東方の丘の上の春の宮殿で催された宴楽の余興に較べたなら、殆ど記憶にも残らない程小規模のものであつた事を附加へて置けば沢山です。其処には生ける人間を以て構成されたあらゆる芸術がありました。「……」岡村君の所謂「芸術」が如何なるものであつたかは、此れで大概了解されるだらうと思ひます。終りに臨んで、私は岡村君の最期の光景——それから十日ばかり後、歓楽の絶頂に達した瞬間に彼が突然死んで了つた事柄を、極めて簡単に記して置きませう。(四九六頁)

「金色の死」という小説の題にもなっている「死」でさえ、「私」には「簡単に記して置」ける内容なのである。後半、「岡村君」の「芸術」的理想郷についての描写に入ってから、「私」は語ることに（書くことに）自覚的になり、小説内「読者」の「想像に委せ」、「了解」されることをよしと

している。つまり、「私」にはそれらが「鬼麗の極み」であること、「岡村君」がその「絶頂」で死んだという事実が重要なのであり、その具体的な内実には重点を置いていない。

そもそも、「芸術の天国」は、「岡村君」が「唯独で楽みたい」ものであり、「私」がそれを見る前提として、「秘密を守ると云ふ条件」があった。その「条件」に背いてまで、「私」はなぜ語らなければならなかったのだろうか。

岡村君はたしかに幸福な人間でした。何故かと云ふのに、彼は自己の全力、全身を挙げて自己の芸術の為に尽し、而も十分な成功を遂げたからです。世の中には彼よりも多くの財産を持ち、多くの学識を持った人は沢山あるでせう。然しながら古来彼程真面目に、彼程単一に、自己の芸術の為に突進した者はないと云つてもいゝでせう。彼と私とはさまざまな点で芸術上の見解を異にして居ましたが、要するに彼の仕事はやつぱり立派な芸術であつたことを認めない訳には行きません。彼の芸術は幻影の如く現れて、彼の死と共に此の地上から消えて了ひました。けれども彼は偉大なる天才者、偉大なる曠世の芸術家であつたのです。(四九八頁)

「私」は相対していた「岡村君」の「芸術」を認め、彼の「評価」を「世間の人々」に問いかけ終わる。「世間の人々は、彼のやうな生涯を送つた人を、果して芸術家として評価してくれるでせうか？」という「私」の問いかけは、純粹な問いにも見えるし、反語的に「評価」されないことへの嘆きにも見える。そう考えたとき、なぜ「私」は「世間の人々」に「岡村君」の「評価」を問うのだろうか。今まで見てきたように、この小説は「岡村君」が描かれた小説である。しかしながら、「芸術」にすべてを捧げた「岡村君」という〈鏡〉に映る「私」も、「芸術」にすべて

を捧げている。

ここまでの議論をまとめてみよう。「私」は「岡村君」の黒子となることで、まず、彼の特異性を強調する。そのうえで、観念的な「岡村君」の「芸術」論への抵抗を試み、語り、そしてその「死」の延長線上に、すべてを捧げた彼への「評価」を強要するのである。

それは同時に、「私」への「評価」を強要するものでもある。なぜなら、「岡村君」の背後で「貧窮」に苦しみ、家族の「生活の為め」に「非芸術家」な仕事に不満ながらも励みつつ、尽きた「思想」に代えた、友人の「死」という体験までもを「芸術」の対象とする「私」の姿勢が見られるからだ。「遊び」惚けていた「岡村君」が「芸術家」として「評価」されるのであれば、体験という血肉を切り取り、語る「私」も当然「評価」されなければならない。つまり、「私」は「岡村君」が「評価」されるため自身「評価」されるために、彼を「評価」しなければならなかった。「私」は語ることで「岡村君」の「芸術」の「証人」⁽¹⁰⁾となったわけでも、「岡村君」の「生」に「羨望と共感を抱いた」⁽¹¹⁾わけでもなく、「世間の人々」という新たな〈鏡〉を創出するために、この物語は語られねばならなかったのである。

IV 結語

テキストの「六」「七」「八」は、「私」と「岡村君」の「芸術」議論(談義)であり、「岡村君」の「芸術」観がよく語られる場面である。そこで「岡村君」は「レッシング」の「文学を批評しながら道徳的の感情に支配されて」いる点を批判し、彼の最も理想的な「芸術」は、「眼で見た美しさを成る可く音楽的な方法で描写する事」であるという。「岡村君」は、「芸術」は「視覚」に依存するものであり、かつ「一目に見渡す事の

出来る美しさ」でなければ、「絵に画いたり文章に作ったりする値打ちはないと信じて居る」。そして、この議論は「含蓄ある瞬間」へとうつり、

「画家に取て選択すべき瞬間があるとすれば、其は唯或る肉体が最上最強の美の極点に到達した刹那の姿態を捉へる事なのだ」と自説を展開する。そして、レッシングの「含蓄ある瞬間」解釈を、「此の理屈で行くと、人間の死んで了ったところなどは絵にも彫刻にもめつたに作れない事になる」とし、「美感を味ふのに前後の事情」を「了解する必要」はなく、「其の瞬間の肉体美さへ十分に現れて居れば沢山」としている。

テキストのなかで、「岡村君」が創作をしている様子は、後半の「芸術の天国」を除き、見られない。その「芸術」も自身が対象化されること、つまり、「華美」な建設や「彫刻」や「生ける人間」をもった土台のうえに、彼が「芸術」品となることでしか完成ができなかった。そういった意味では「岡村君」は理念的で観念的な「芸術家」である。裏を返せば、「芸術」品として「値打ち」のある対象を自身以外に見いだすことができなかった、というのが「岡村君」である。

言うまでもなく、この小説は「岡村君」とその死が対象であり、それは、「私」が「岡村君」に「絵に画いたり文章に作ったりする値打ち」を見いだしたことを意味する。

「金色の死」は、「私」が描く「岡村君」の「死」という、「或る肉体が最上最強の美の極点に到達した刹那の姿態」を描いた小説である。そして、それは「岡村君」が「芸術」の対象として否定した「人間の死んで了ったところ」を描くことであり、「岡村君」の「芸術」観に対する、「私」の抵抗の筆跡でもあるのだ。

注

- (1) 谷崎潤一郎「金色の死——或る富豪の話——」『東京朝日新聞』（一九一四年「大正三」年二月四日〜同月一七日）
- (2) 清水良典「金色と闇との間——谷崎潤一郎「金色の死」をめぐる——」『群像』（一九八七「昭和六二」年二月）
- (3) 浅見歩惟「谷崎潤一郎「金色の死」論——〈私〉の変化にあらわれる芸術観」『言語・文学研究論集』（二〇一三「平成二五」年三月）
- (4) 藤崎早苗「金色の死」論——美の創造と体現と——『國學院大學大学院文学研究科論集』（一九九六「平成八」年三月）
- (5) 高橋美晴「谷崎潤一郎『金色の死』試論——「私」という証言者」『宇大國語論究』（二〇一〇「平成二二」年三月）
- (6) 三島由紀夫「解説」『新潮日本文学6 谷崎潤一郎集』（一九七〇「昭和四五」年四月、新潮社）
- (7) J・ラカン／小出浩之・鈴木國文・小川豊昭訳「鏡像段階論」『岩波講座精神と科学』別巻（一九八四「昭和五九」年三月、岩波書店）
- (8) 新宮一成『ラカンの精神分析』（一九九五「平成七」年一月、講談社）
- (9) 注（2）に同じ
- (10) 注（5）に同じ
- (11) 注（4）に同じ

※付記——本稿の本文引用は『谷崎潤一郎全集』第二卷（一九八一「昭和五六」年六月、中央公論社）による。なお、引用中のルビは省略し、旧漢字は新漢字にあらため、引用中に「」で示した注は論者による。